平和を阻む「日常性」—ナショナル／トランスナショナル・バイオレンスにかかわる「ジェンダー」

ロニー・アレキサンダー *

プロローグ

"Lesbian and gay men are 'less than human,' therefore they are not entitled to human rights." (Zimbabwe President Robert Mugabe)[1]

2002年10月3日アメリカのカリフォルニア州で17歳の若者が殺され、遺体が山奥に捨てられた。容疑者として、4人の成人男性が逮捕されたが、そのうちの一人は「見ていただけで、手は出さなかった」と証言している。しかし、仲間が振るう暴力を止めようともしなかった。[2]

若者を「G」と呼ぼう。Gはなぜ殺されたのか。そして、それを見ていた男性はなぜ止めようとしなかったのか。直接的な原因は、男たちがGの「性」と「ジェンダー」を容認できなかったことにあると思われる。GはMtF (male to female, 男から女へ変わる) のトランスジェンダー (TG)、つまり身体の生物学的な「性」が男だったのに対して、心の「ジェンダー」は女性であった。殺された日は初めてスカート姿で外出したそうだが、飲んでいる席でGは「女性に見えるが本当は男性」という「事実」がばれて、周りの男性たちの反感を起こしてしまったという。Gは外へ連れ出され、殴られたあと絞め殺された。

黙ったまま最後まで見届けていた男性は以前、他の3人の仲間にGと性的関係ができたと自慢したことがある。3人の仲間は、Gを「女性」だと思っていたに違いない。もしもGが「男性」だったら、「彼」と性的関係を持った男性は同性の人とセックスをしたこと

＊神戸大学大学院国際協力研究科教授

になるわけである。仲間にホモセクシュアル（同性愛者、ゲイ）だと思われることを恐れていた男性は、Gの肩を持てば、自分の「男らしさ」（この場合は性的指向）がさらに問われることになると思ったようである。彼にしてみれば、黙って見守るしか選択肢はなかった。[3]

Gの死には少なくとも三つの異なった問題が絡んでいると思われる。一つには、TGとりわけMtFの人たちに対する偏見の問題である。これは、Gの演じていた「ジェンダー」が身体の「性」と違うと知ったとたんに怒り出す男性たちの問題で、いわば偏見を抱く側の問題である。二つ目には、怒り出した男性たちのまわりの人たちの問題である。殴り合いを目撃した人がいるだろうと思われる。いたということを前提に考えれば、その人たちに偏見がなかったら、止めようとしていたに違いないであろう。もしそうだとしたら、偏見を持っていたのは逮捕された4人だけではない。三つ目には、助けようともせずに見守っていた男性が「ホモセクシュアル」だと思われることに対する恐怖の問題である。彼の恐怖は、彼自身と現場にいた人たちが共有する「日常的」な偏見によって生じたものである。

性とジェンダーとセクシュアリティ。確かにそれらに対する偏見を原因とするゲイ・バッシングなど、セクシュアル・マイノリティの人たちに対する暴力はそれほど珍しいことではない。[4] しかし、ジェンダー・性・セクシュアリティはなぜ暴力を招くほど重大なのか。Gを殺した3人の男性は何を守ろうとしていたのか。Gはなぜ死んだのか、死ななくてすむ方法はあるのか。本稿ではその答えを探ろう。

1．はじめに　「平和の創造」を目指して

男と女。男でなければ女。女でなければ男。これが「自然」であるとされるが、次節で明らかにするように、「自然」では必ずしもない。男と女と聞いただけで、ほとんどの人はある種の社会的な秩序のイメージができる。しかし、それは社会的に構築されたものであり、「自然」なものではない。さまざまな社会制度や秩序は二つの性の存在と、それらの役割や組み合わせ（結婚など）を前提にしている。性の概念がその曖昧性を欠落させたまま、ほとんどの人に内面化され、「自然」となっているのである。その「自然」がグローバル化によっていっそう広がり、世界的に容認されつつある。しかし、欠落した部分は見えなくなったが、消えたわけではない。なお、いわゆる「第三の性」[5] は社会によって存在が認められているが、多くの場合は性にかかわる曖昧な部分が認識されない。

本稿では、このように一般的に「自然」（あるいは「当然」）と認識されるものを、少々無理を含んでいることを意識した上で「内面化された日常性」と呼ぶ。もちろん「日常性」は必然的に内面化されたものだという議論はあろう。しかも、「日常性」は社会や文化によって異なる。本稿では、曖昧さを含んだ概念であること前提にしつつ、「内面化された日常性」の文脈でとくに注目するのは性（性

別、セックス）としての男・女やジェンダーとして男性・女性といった概念である。なお、性とジェンダーの区別をはかるために、本稿において、生物学的な性を表す時は「女・男」を使用し、ジェンダーを表す時は「女性・男性」を使用する。

性にかかわる規範が「自然」とされる以上、その規範の範囲外の「性」の捉え方は「自然」でなくなり、「不自然」として隠されたりする。隠された部分がやがて不可視となり、「自然」とされるもののみが認識されるが、「自然」以外の部分（「不自然」とされた部分）は消えるわけではない。不可視化されているだけである。このような不可視化のプロセスにはある種の「暴力」が潜むと考える。その暴力は、いわゆるセクシュアル・マイノリティ[6]に対する偏見の基盤となると同時に、ジェンダーに関する規範やジェンダーに伴う偏見（性差別等）などの形成にも影響を及ぼす。

最近、このような不可視化されていた性やセクシュアリティを可視化する運動が世界各地で広がっている。このような運動はセクシュアル・マイノリティの人々の権利獲得に役立っている反面、彼らに対するヘイト・クライム（hate crime）などを引き起こしている。地球上のほとんどの社会が暴力化するなかで、今まで認識されてこなかった人々に対する拒否が暴力によって表現されることが多くなってきた。Gに対して振るわれた暴力はその一例である。

本稿では、三つの「内面化された日常性」に基づく暴力が重なり合ってGの死に至ったと仮定する。一つは、セクシュアル・マイノリティに対する偏見によって生じる暴力である。二つ目は、世界に広がってきた「暴力の文化」である。この「暴力の文化」は、問題解決に暴力を使う頻度や使われる暴力の強度が高まっている状態を指す。たとえば、Gの場合、言動のみの暴力が殺害にまで拡大したことの原因の一つに暴力の文化があると考えられる。三つ目は、個人のレベルでも生じるが、特に注目すべきは国家やネーションの形成の中での性（セックス）・ジェンダー・セクシュアリティの捉え方から生じる暴力である。具体的には、性（セックス）とジェンダーをセットとして捉え（男の身体は男性の役割、女の身体は女性の役割）、それらが二項対立関係にあるということである。Gは男としての自分に対して否定的であったが、男としての自分も女（女性）としての自分も持ち合わせていた。つまり、Gの性とジェンダーは「セット」ではない。世の中には、男でも女でもない（あるいは両方である）人がいるのに、選択肢が男（男性）か女（女性）しかない。性的指向も一般的には性・ジェンダーの「セット」に基づく異性愛しか許されないのである。このことを国家やネーションの形成に関連づけて論じることにする。

直接的なかかわりを持っていない限り、上述したような暴力を意識することはあまりない。しかし、Gの死のような「非日常」的な出来事をきっかけに普段見えにくい暴力が一時的に見えるようになる。可視化されている間は、議論の対象にもなるが、不可視のまま

だと、議論すらしにくくなる。この「日常的」に内面化された暴力こそが構造的な暴力であり、平和の創造を脅かす重要な原因である。

暴力をジェンダーの視点から分析することは目新しいことではない。とくに最近、戦争、女性に対する暴力といったテーマをジェンダーの視点から論じた研究が増えており、軍隊における女性の地位や立場、日本軍慰安婦の問題、戦争の一環としての性暴力、売買春や人身売買の問題などがその具体的な内容である。これらの着眼点は主に平和を阻む直接的な暴力である。本稿ではそれらの研究と同様にジェンダーの視点を用いるが、少し観点を変えて、どちらかといえば不可視な暴力に着目する。「ジェンダー」や「性」といった概念に含まれる暴力性を可視化し、性・ジェンダー・セクシュアリティとネーションや後述する戦争システム（war system）とのかかわりについて論じる。

以上のように、戦争システムの中の個人、とりわけ個人の性・ジェンダー・セクシュアリティに着目しつつ、それらと社会全体の関係を検討してみる。「日常性」は社会的に構築されるものであるが、日常性の形成過程においてもっとも重要なアクターは個人であろう。本稿では、平和を阻む日常性をみるには、各個人に内面化されている「自然」に着目しつつ、次のように議論をすすめていく。

まず、性とジェンダーにかかわる不可視な暴力を可視化するために、簡単に性・ジェンダー・セクシュアリティの概念整理を行なう。次に、個人のレベルでの問題が世界のレベルでの「暴力の文化」にどのようにつながるかを考えるために、「戦争システム」（war system）に着目し、その一環としての「ネーション」をジェンダーやセクシュアリティの視点から考察する。最後に平和の創造に向けて、Gの死をふりかえながら、平和を阻む日常性をどのようにすれば是正できるかを考える。その事例として、Gを追悼することを含めて、「トランスジェンダー追悼の日」という運動を紹介する。Gはなぜ殺されたのか。回答を提示することで、殺されなくてすむような新しい社会像を探ってみたいと思う。

以上のように、本稿では本質的な性やジェンダーの概念を疑問視しつつ、女性にとって不利である現在の秩序を是正することを提言する。しかし、そこには一つの矛盾が生じる。確かな平和を創造するためには、平和を阻む日常性を是正する必要がある。そのためには、現時点での社会の常識を視野に入れなければならない。その常識の一つは、二項対立関係にある性とジェンダーを「自然」とするという認識である。もう一つは、社会が不平等なジェンダー関係のうえに成り立っていることである。後者の不平等を是正するには、二つ（とされる）の性と二つのジェンダーが平等に社会の諸資源や権力に接近できるようにしなければならないが、それを対象とするアプローチのほとんどは、前者を無視しがちである。「自然」とされるものは「自然」ではない。性・ジェンダーの二項対立関係を前提とするシステムそのものの変容が必要である。そのためには、ジェンダー・性・セクシュア

リティに着目し、それらの関係性やそれらにかかわる規範を変える必要がある。

一方、いくら「性はグラデーションだ」と叫んでも、世の中の常識は男と女という性と、それらに基づく男性と女性というジェンダーを前提とする。本質主義的な「女」・「男」の存在を否定することはできるが、それらの関係性に変容を求めるためには二つのジェンダーを認識しなければならない。とりわけ「女性」と呼ばれるジェンダーは「男性」と呼ばれるジェンダーより社会的な資源への接近が難しいということは否定できない。フェミニストとして、「女性」に着目したい。しかし、「女性」とはいったい誰のことであろうか。

この問題は容易には解決できない。本稿では、とりあえず、「女性」・「男性」というグループの構成に着目する。普段、これらのグループは生物学的な性を前提に構成員を定めることが多い。しかし、生物学的な性以外にも構成員を定める方法はある。政治的なイデオロギーもあるし、外見などによる「ジェンダー」判断もある。ここでは、「ジェンダー」を中心とする自己申告（本人が女性であるかどうかは本人が決める）によって、この問題の解決をはかる。[7] つまり、性もジェンダーも社会的な概念として考え、その関係性も社会的に構築されたものとして捉える。女性差別は女性が本質的に「女」だから起こるのではなくて、社会の権力関係のなかで特定の「女性」がつくりあげられるから起こるのであろう。本稿では、社会的につくられた「女性」・「男性」の根本的な働きを問うことにしよう。[8]

2．性（セックス）・ジェンダーの二項対立から生じる「日常的」な暴力

では、話をGのことに戻そう。Gは男？女？男性？女性？どちらでもある？それともどちらでもない？どのような理由によってその判断をするのか。いったん決まったら、永遠に変化しないのか。本節では、Gのことを例にとりながら簡単に概念の整理をしてみよう。

Gの出生証明書におそらく「セックス」という欄があり、それに記入されているのは「M」（男）であろう。それは、生まれたときに医者が身体の特徴をみて判断したことによるものであろう。これは性別、つまり「性」・「セックス」という自然的・生物学的性差を意味する。二つの性別を定義するのは、生物学的な機能や特徴（二項対立関係にある男女の差異）を中心にする説明と、社会的な機能の差異を中心にする説明がある。身体の特徴を中心に、外性器、内性器、内分泌、遺伝子（XX＝女、XY＝男）などが判断材料になり、多くの人はそういった基準に該当する。しかし、インターセクシュアル（半陰陽者）など、そういった特徴を備えた男と女の間にはさまざまな人がいる。[9] 性別研究で著名なマニー（John Money）氏は、自然的性差の連続性や、生まれる前の内分泌などによる影響を明らかにした。[10] このようなことを考慮すると、性は二項対立的な関係にあるのではなくて、むしろグラデーションであるということが明らかであろう。

生物学的な特徴や機能をもとに性を社会的な機能として定義すると、女を母親としての

性、男を働き手や戦士としての性のように分類できる。しかし、出産できるという機能を基準にすると、たとえば性器などによって「女」だと判断され、自らがそうだと自認している人が、不妊症と診断された場合、「女」でなくなってしまう。さらに、「母」や「戦士」といった社会的役割は、生物学的な必然性より社会的な根拠によるものなので、生物学的な「性」と社会的な「ジェンダー」とを分けるにいたった。

Gは男の身体的特徴を持っているので、性別は一般的に「男」と判断されることになる。しかし、「彼」はスカートをはいたりして、現に女性に間違えられた。となると、少なくともまわりの人たちにとって、「彼」は「彼女」であった。これは、ジェンダーの問題である。

「ジェンダー」は、「性」・「セックス」に対比して、「社会的・文化的性差」と定義されるのが一般的であろう。別のことばで表すと、「女」「男」はセックスを意味するのに対して、「女らしさ」「男らしさ」が「ジェンダー」にもっとも近い言葉であろう。[11] 手術などの措置をとらない限り、身体の「性」（セックス）を変えることができず、基本的にどの人間でも男または女としての性的特徴（外性器、内性器など）を持っている。このようないわゆる普遍性に対して、ジェンダーは社会的な概念であるために、変えることも変わることもある。もちろん、ジェンダーは社会によって概念の表し方が異なる。

Gの場合、体の「性」は男であったかもしれないが、見た印象は「女らしい」人だったようである。ジェンダーは、イメージやある種の理想であり、社会的・文化的・歴史的につくられた女性・男性の「お手本」である。しかし、イメージや理想でありながらも、それらを社会の中で維持する「ルール」でもある。普遍的な側面もあるにせよ、それぞれの社会の中でできたものだから、社会によって、そこで語られる「らしさ」が異なる。それぞれの社会の構成員は、ジェンダーにかかわる固有のイメージや理想を内面化している。個々人はそれらの内面化された「ジェンダー」を自らの日常的な行動に100%反映させるとは限らない。むしろ、個々人は理想をある程度意識しつつ、自らの「女性」「男性」を演出する。日常においては、ある程度のルールに従っていれば、個人が演出するジェンダーにはかなりの幅があるとは言えよう。しかし、「非日常」では、それぞれの本来のジェンダー・ロール（性役割）[12] を演じることが要求される。冠婚葬祭や非常事態、天災、武力紛争といったものは「非日常的」な事態で、普段は「ジェンダー」をあまり意識しない人でも、そういったときに「ジェンダー」を感じたり、演じたりすることが多い。

Gに対する暴力が発生するまで、Gやその仲間はバーで飲んだり食べたりしていた。つまり、「日常的」な行動をしていた。しかし、Gの身体の性がばれたとき、日常的な場面が急に非日常的なものに変わった。Gの（乱れているとされた）性やジェンダーに対して、まわりの男性たちが極端なジェンダー役割（外見や態度が極めて「男らしい」姿）を見

せた。そのような極端な「男らしさ」を表現する必要性を疑問に思った人たちはいただろうが、彼らの「男らしさ」と異なるジェンダー役割（例えばもっとソフトな男らしさ）を演じることはためらわれた。それがGの死をもたらす大きな要因の一つであろう。

しかし、ここで問題にすべきは、Gが男か女かということではない。それより注目すべきは、選択肢が男（男性）か女（女性）という二つしかなかったということである。さらにいうならば、男か女かだけではなくて、身体的な特徴と社会的文化的特徴とが合致しなければならないという期待も注目すべきであろう。その期待は社会的なものであるが、多くの人はその期待を内面化し、個人として持っている。Gの殺害を招いたのは、ジェンダー役割が「女性」だったために身体的にも当然「女」だという期待があった。Gの身体が「男」だとわかった時点で、三人の男性は裏切られたと思ったのであろう。同時に、そういう人と性的な関係を持とうとした自分たちのセクシュアリティもそこで問われることを恐れたのであろう。その怒りや不安を暴力という極端な「男らしさ」や「男性性」を用いて表現してしまった。性とジェンダーが一致しない場合もあるという認識があったら、暴力的な反応を起こさずにすんだのかもしれない。

繰り返しになるが、一般的には性およびジェンダーは二つしかないとされる。人間の本質的な性（セックス）は「男」または「女」に分類され、それに基づいて「男性」または「女性」に分類される。男でなければ女、男性でなければ女性ということになるわけである。このことは本稿でいう「性・ジェンダー二項対立」である。どちらの要素も持ち合わせている人や組み合わせが異なっている人たちは、性またはジェンダーの二項対立にかみ合わない。社会の「信念」に自分を合わせようとする人、強引に合わせられる人、自由に自らを表現しようとする人はいるが、多くの場合、このような人々の存在は隠されたり、病気とされたり、「矯正」されたりしてきた。なお、性およびジェンダーの「二項対立」は、性・ジェンダーの二元論（二つの異なる性・ジェンダー）に基づくが、一つでなければもう一つであるということで、二項対立の方の縛りが厳しい。

以上のように考えると、Gが殺された原因の一つは、二項対立としての「性」の概念にあると結論付けることができよう。Gは女性に見えたが、身体は男であった。アメリカ社会では、女性なら身体も女、さもなければ男性なら身体も男でなければならないと考える人が多い。両方の性・ジェンダーを持ち合わせていたGは許されなかったわけである。

たしかに、ほとんどの人間の場合、女（男）という性（体）をもつ人は、女性（男性）というジェンダーを自認しているであろう。しかし、実際には、性とジェンダーが必然的に一致するものではない。性別として「女」（男）という人は、ジェンダーとして必ずしも「女性」（男性）であるとは限らない。社会にとってそうであるべきという固定観念は、

現実と大幅にずれている場合もある。[13] 性同一性障害（Gender Identity Disorder, GID[14]）やトランスジェンダーの人たちなど、Gの仲間は世界中にいるはずである。その一部であるインドのヒジュラなど、いわゆる「第三の性」の存在が認識されている社会がその例である。しかし、この場合の「性」の意味は、性別やジェンダーに加えて、セクシュアリティも判断材料にされる。[15]

人間の多くは、生物学的に「女」あるいは「男」であろうが、実際には連続性を備えたものである。しかし、性がグラデーションであるにもかかわらず、世界のほとんどの社会では、人間関係にからむ法的制度の多くが男女という二つの性を前提にしている。結婚、相続、親権はもとより、国によっては兵役、参政権、職種や仕事の内容などにも「性」が直接的に関係する。兵役ではなくても、軍隊への参加資格や参加の仕方も問題になる。個人の生活においても、法制度においても、性・ジェンダーにおける二項対立関係が「日常的」な暴力の原因となるわけである。

3．セクシュアリティを原因とする「日常的」な暴力

Gはなぜ殺されたのか。たしかにGは自らの性とジェンダーの不一致という問題を抱えていた。しかし、問題の所在はGの側にのみ存在しているわけではない。Gを取り巻く社会にも問題がある。それは、Gの性とジェンダーの不一致を受け入れることができないということである。「体が男だけれど、私は女だ」という主張はGのまわりの人たちには通用しなかったようである。Gの状況が理解されない理由として、性とジェンダーがセットでなければならないという期待から生じるセクシュアル・マイノリティに対する偏見があると思われる。これは「セット」としての性とジェンダーの二項対立関係だけでなく、異性愛以外の性的指向など、セクシュアリティにもかかわる偏見である。

日常的に演じるジェンダー役割とは別に人々のセクシュアリティ（性的アイデンティティ）がある。[16] セクシュアリティをジェンダーによって定義する人もいれば、性的指向によって定義する人もいる。ローバー（Judith Lorber）よると、セクシュアリティを判断する尺度を性器、性的相手、外見、感情、自己アイデンティティ、性的行為と6つに分類でき、それぞれの分類にさらに複数のカテゴリーがある。[17]（表1を参照）。

ローバーの分類は、セクシュアリティという概念の幅広さと、私たちの言語化能力の乏しさを示していると思われる。セクシュアリティがジェンダーや性との組み合わせによって、個人の社会における大まかな位置や社会の中での行動を規定する。一見平等に見えることも、実際には優先順位ができている。たとえば、本来ならば対等であるはずの女性と男性だが、男性より女性のほうが下位であるという現実は、社会のあらゆるところに反映される。たとえば、家庭の中だと家父長制や男から女への家庭内暴力、会社の中だと役員層における極端な「女性不在」の現状やセク

表1　ローバー（Lorber）による西洋的なセクシュアリティの分類　（一例）

1．性器によるセクシュアリティ（5 sexes）

① 疑いなく女　② 疑いなく男　③ インターセックス（半陰陽; intersex {hermaphrodite}）

④ トランス：(transsexual; male to female {MtF})　⑤ トランス：(transsexual; female to male {FtM})

2．性的相手の選択を基準とする性的指向（3 sexual orientations）

① 異性性愛　② 同性性愛　③ 両性性愛

3．外見によるジェンダー提示（5 gender displays）

① 女らしい（feminine）　② 男らしい（masculine）　③ 不明瞭（ambiguous）

④ 男装（cross-dressed as a man）　⑤ 女装（cross-dressed as a woman）

4．感情による関係（6 relationships based on emotional bonds）

① 親友（intimate friendship）　② エロスを含まない愛（non-erotic love）{親子、兄弟など}

③ 性愛（eroticized love）　④ 熱愛（passion）　⑤ 色情（lust）　⑥ 性的暴力（sexual violence）

5．自己アイデンティティ（10 self-identifications）{関係するグループ別}

① 異性性愛（straight）の女性　② 異性性愛（straight）の男性　③ レズビアン（同性性愛者）女性

④ ゲイ（同性性愛者）男性　⑤ 両性性愛者　女性　⑥ 両性性愛者　男性　⑦ トランスジェンダー（transgender {TG}; transvestite{異性装}）女性　⑧ トランスジェンダー（transgender {TG}; transvestite{異性装}）男性　⑨ トランスセクシュアル　女性（MtF）　⑩ トランスセクシュアル　男性（FtM）

⑪ － ⑭　上記 ⑦ － ⑩ をTG・TSがレズビアン・ゲイとして考えた場合

6．性的行為（sexual relations）

① 男性と　② 女性と　③ 両性と　④ 一対一　⑤ グループ　⑥ 一人で　⑦ 全くしない

⑧ TG／TSとして　⑨ TG／TSを相手として　⑩ SM　⑪ 動物と　⑫ もの（フェテイッシュ）

⑬ ポルノ　⑭ 性的道具　⑮ ETC.

→　現在の西洋社会において、ジェンダー化されたセクシュアリティの選択肢は次の4つである：

① 異性性愛者　女性

② 異性性愛者　男性

③ 同性性愛者　女性

④ 同性性愛者　男性

（Judith Lorber, Paradoxes of Gender. Yale University Press, 1994, p.59より筆者作成。なお、ローバーはTGのカテゴリーをtransvestite／cross-dresserのみと狭く位置付けている）。

シュアル・ハラスメントなどの例がある。どの社会においても性差別やジェンダー・ヒエラルキー[18]が存在し、男女平等（「男」と「女」以外の人々は注目すらされない）はまだ実現できていない。「ジェンダー」にかかわる力関係はそのまま、セクシュアリティ（セクシュアル・マイノリティ）の関係に反映される。もちろん、エスニシティ、階層などとの組み合わせによって、さらに複雑になり、暴力を招く可能性が高くなる場合もある。[19]

セクシュアリティは偏見の材料にはなるが、ジェンダー・ヒエラルキーによって、性差別と重複する場合もある。例えば、Gの場合はMtF、すなわち男性から女性へ変わる立場であった。TGの人たちのなかで、社会的により有利な立場へ変わるFtMの人たちは、より不利な立場に変わろうとしているMtFよりいくぶんか楽だとされる。

ジェンダー・ヒエラルキーは、人身売買などにも見られる。たとえば、性産業に売られる子どもには貧困層の女の子どもが多いが、買う側は大人の男性がほとんどである。もちろん、そういう成人男性が性的相手として男の子どもを選ぶ人もいるが、女の子どもを選ぶ人よりは少ない。アムネスティ・インターナショナルによると、「性差別や同性愛者への嫌悪が社会に蔓延している場合に、レズビアンは特に虐待を受け易く、強制的に結婚させられたり、男性と性的行為を強要させられるなどの被害を受けている」。[20] また、同性のカップルの間にも家庭内暴力が生じることはあるが、駆け込みセンターなどはゲイの人たちを受け入れず、相談に乗らないことが多い、という。[21] こういったこともセクシュアリティやジェンダーの固定観念に基づく偏見を示している。

ジェンダーやセクシュアリティにかかわる優先順位は社会的に構築されるものである。表1に「社会的に容認される」性的アイデンティティが示されているが、これは「西洋社会」における社会的に構築された優先順位を示すものである。この「社会的に容認されている性的アイデンティティ」は、本稿でいう「日常性」を示すものである。優先順位が低い性的アイデンティティ（セクシュアリティ）は容認されにくい。個人のレベルだけではなくて、ネーションや国家のレベルでも偏見の対象となる。たとえば、世界の多くの国では、同性間（特に男性間）の性的行為は非合法であり、しかも死刑の対象となる国もある。また、冒頭の引用にあったように、「同性愛者は人間（human）ではないので、人権（human rights）が適用されるべき対象ではない」というジンバブウェの大統領の発言にも見られる（注1を参照）。アメリカにある国際ゲイ・レズビアン人権委員会というNGOによると、「多くの国では、政府がセクシュアル・マイノリティの人々に対する暴力を直接的にもしくは間接的に許している」。セクシュアル・マイノリティに対してより寛容な法律を制定している国でも、政策の運用は、特定の性的指向やジェンダー・アインディティを持つ人たちを「二等市民」として扱う。「存在そのものは合法であっても市民としての

地位は明らかに他の人たちより下位である」。[22]

人間は生まれたときに性別が判断され、判断された性別やジェンダーに沿うような行動を期待される。最初の判断が誤ったり、本人の性的自認が違ったり、性的指向が同性に向かったりすることはしばしば起こるが、これらのことがほとんど社会的に容認されることはない。仮に許されることになっても、社会的に歓迎されることではないであろう。歓迎されないことを「当然」とすることは、社会の「日常性」に潜む暴力の一つである。

4．ネーションの形成がもたらす「日常的」な暴力

性・ジェンダー・セクシュアリティは個人のレベルで演じることになるが、社会的に構築されるものである。この場合、極めて有力な「社会」の一つは「国民国家」（nation-state）の基礎的単位とされる「ネーション」である。現在の世界において、ネーションは国民国家と必ずしも一致しているわけではないが、国家の「顔」と精神として、「ナショナル・アイデンティティ」という形でネーションが使われる。[23] 国民国家の原型（または理想）は、一つの国に一つのネーション（民族）が存在するということになっているが、実際には、国家とネーションの境界線は一致せず、一つの国家に複数のネーションが存在する。

ネーションには研究者の数ほど定義はあるが、共通の言語、現在または過去においての共通の領土、共通の歴史や文化などが一般的な条件であろう。ユバル＝ディビス（Yuval-Davis）は、共通の歴史と「共通の運命」を条件として主張することを前提に、「ネーション」を三つに分類している。それは、共通の文化を主張するネーション、共通の起源・発祥地を主張するネーションと、国家が与える市民権などによって正当性を主張するネーションである。[24] 一般的にこれらのネーションはジェンダーやセクシュアリティとは関係のないものとされるが、本稿では、ネーションには優先されるジェンダー（あるべきとされる男性性とあるべきとされる女性性）とセクシュアリティ（異性性愛）が存在し、ネーションの「日常性」を形成する基礎的なものとして考える。

これらのネーションの構成員はもちろん個人であり、ジェンダーのほかにも階級、人種、宗教など社会的な属性をいくつも持ち合わせている。個人にだけ焦点を合わせると、一人ひとりの人間は複数のアイデンティティを持ち、それらはすべて、その本人自身に帰着し、個人によって異なる。しかし、個人のレベルとは別に、社会のレベルでは集合体としてのネーションも存在する。ナショナリズム運動が掲げるさまざまなネーションは、個人と社会、または社会や個人同士の関係性の中で構築されるものである。ネーションとそれを主張するナショナリズムはある意味でフィクションであり、スローガンである。概念としてのネーションは、極めて柔軟で広いものである。しかし、さまざまな目標達成のために主張されるネーションはその柔軟性を欠いている。

個人として感じるネーションは、人によって異なり、表現の仕方も異なる。しかし、誰しもネーションの存在から逃げることはできず、ネーションの存在は生活の一部である。関わり方や認識の度合いこそ異なるが、ネーションの存在は社会の構成員全員の共通の体験でもある。

ネーションの形成にはさまざまな要因があり、形成される場も複数ある。外部要因としては植民地化を含めた歴史などを指摘できる。内部的な要因として、文化、宗教、神話などがある。また、ネーションやそれを主張する言説としてのナショナリズムには公の側面とそうでない側面がある。公に使われるナショナリズムはたとえば政治的なスローガンである。事例としては、イラク攻撃を正当化するブッシュ大統領の演説がある。ブッシュ大統領は「アメリカ人としての正義感」などに訴えることによって、多くの人々の支持を得ることができた。

ネーションの意識は、学校の授業や政治演説といった場もあるが、注目すべきはむしろそれぞれの生活の場での日常的な営みからも形成される。食事、服装、使用言語や表現、家族関係、人々の名前や呼び方、代々伝わる「常識」や「知識」―こういったものはすべてネーションの形成に役立つ。おなかを壊したら「おかゆ」と「梅干」。これもネーションを形成する材料である。

日常的に営まれるネーションは、性・ジェンダー・セクシュアリティと密接に関連しており、それらの社会的優先順位がある。性的行動については、ある程度の個人としての選択の自由が認められるが、性欲や性的行動を制度化するのが国家である。それらを「結婚」などによって制度化することは、人々の性的行動を制限すると同時に、ある性的行動や性的指向を優先的に扱うことになる。つまり、男と女による家庭は、社会制度としてきわめて重要であり、近代・現代の国家形成および国民のアイデンティティ形成などにとっては欠かせないものである。しかし、多くの社会において、男女のカップルによるいわゆる「異性愛」が最優先されたとしても、それとは異なる多様な性愛も同時に存在するのである。

セクシュアリティは社会的に構築されるものである。性とジェンダーのほかに階層やエスニシティ、歴史などといった要因が関係するので、さらに定義は困難である。表1が示すとおり、セクシュアリティのとらえかた、表象のしかた、演出のしかたなどは文化によって異なるだけではなく、一つの文化の中でも立場によって異なってくる。ジェンダーやセクシュアリティはさまざまな形でネーションとの接点をもつ。短絡的にいうと、たとえば「日本人」、「日本男児（ニッポンダンジ）」、「やまとなでしこ」などの概念やイメージにはアプリオリにジェンダーのみならずセクシュアリティが含まれている。[25]

このようにして、生まれた瞬間から個人としての自分と同時に社会の中の自分の形成が始まる。幼児期に性やジェンダーについての意識や認識ができると同時にネーションの基

礎ができ、それらのアイデンティティに気づく。ネーション形成に積極的にかかわろうとしなくても、次世代の世話をする「母」としての「女性」たちは、子どもを健康な大人に育てるのと同時に、文化を継承する次世代のネーションを育てることになる。しかし、育てるのはネーションだけではない。同時に「ジェンダー」も「セクシュアリティ」も育てられる。次世代を育てるということは、国民や民族と同時に、次世代の女性と男性を育てることである。その子どもたちが大きくなり、ネーションの担い手になる。そして、また次の世代をつくることが期待される。個人として子どもをつくるかつくらないかは別として、そのような期待の存在に気づくのは幼い頃であり、それが「当然」・「自然」であるからこそ、ほとんどの人は疑ったりしない。しかし、これも平和を阻む「日常性」の一つになりうるわけである。

以上のことを示す例は、次の言葉である。"If the Woman does not want to be Mother, Nation is on its way to die."[26] 個人ではなくて、国民としての女性が、国民の役割としての「母」を果たしたくなくなれば（母としてのジェンダー役割を自らの意思でしたくなくなれば）、ネーション（民族）が滅びはじめるであろう。つまり、国民国家はジェンダーありきの存在である。家庭の中にいる女性を中心とするネーションの形成は、上述した文化や発祥地を中心とするナショナリズムの基礎となる。

ネーションとナショナリズムは、差異（difference）を主張する言説である。ネーションの再生産は上述したように女性を中心として話されるが、ネーションそのものは主に異性性愛・男性を中心に語ることが多い。差異を主張とするネーションを守るのは男性であるという考え方が一般的であろう。この場合、性としての男がジェンダー（男性性）と組み合わさるだけではなくて、セクシュアリティ（異性愛）も加わってくる。ネーションを再生産する女性を支配することが男性性の表象の一つであるために、ネーションを守る兵士と性にかかわる暴力（レイプ、買春など）が結びつくのである。また、ジェンダーと市民権の問題としては、軍隊への参加が事例になる。国によっては、共同体のなかで完全なメンバーシップを得ることができるのは、ネーション（国家）のために戦うことができる場合のみである、という言説がある。女性は男性と同等に軍隊に参加できなければ、国民としての同等な資格を得ることができない。軍隊の中にいる女性の問題においては、ジェンダー不平等だけではなくて、ジェンダー・バイオレンスやセクシュアル・ハラスメントなども問題になるであろう。もちろん、ゲイやレズビアンの軍隊参加も問題視される。また、軍隊の周辺にかかわる「日常性」として、慰安婦や軍事基地の周りで行われる売買春、軍人によるレイプなどがある。[27] もちろん、本来ならばこのような性にかかわる暴力は「非日常的」なものである。それらが「日常化」する過程と、その過程を支える「日常的」な認識がもう一つの平和を阻む「日常性」で

ある。

女性を介してナショナリズムが主張する差異には、モダンなものとそうでないものがある。エンロー（Cynthia Enloe）らが指摘するように、ナショナリズムがモダンな運動として捉えられている場合、女性は「モダン」なものとして表象されるが、モダンなものに対抗する運動として現れた場合、女性は逆に「伝統」のシンボルとして表象される。これを示す事例としては、ムスリムの女性たちがかぶるチャドルやベイルに関する議論がある。先進国では、たとえばフランスの学校やアメリカでの身分証明書の写真では、チャドルやベイル着用は認められていない。また、イスラムの中でも、ベイルは「モダン」な女性たちが使う非西洋的なシンボルであると同時に、抑圧されている「非モダン」な伝統のシンボルとして使われることもある。

女性がネーションの再生産の主な担い手であるとすれば、そういった「伝統的」な役割をしない女性たちは非難の対象になりやすく、女性の立場を一層弱くする。また、市民権を得る（あるいは完全な市民権を与えられる）ために、ネーション（多くの場合は国家）のために戦う存在としての軍人の言説があるが、そのなかでの女性としての役割もジェンダーとナショナリズムの着眼点の一つであろう。

脱植民地化後のネーション形成にもジェンダーやセクシュアリティが重要である。例えばバハマの場合、脱植民地化に伴って、国際社会に受け入れてもらうために、国家形成のためのあらゆる努力がなされた。その一つとして、1986年の「性的犯罪法」（Sexual Offences Act of 1986）がある。これによると、「わいせつ行為」に「同性の人との性的行為」が含まれる。同性愛者として有罪になると、20年の刑を受けることになる。このようにして、国家がセクシュアリティを規定し、国民の概念を形成するのである。[28]

5．「戦争システム」・「暴力の文化」が生む「日常的」な暴力

国際社会は複数の国家によって形成されているが、それらがまた複数のネーションを主張する。国家間関係は平等であるとされる一方、実際には国際システムにおいて、軍事力、経済力などによる格差が存在する。これらの格差をシステムの構造的な暴力として位置づける「戦争システム」（war system）という概念がある。リアドン（Betty Reardon）が提唱する「戦争システム」は、国家を単位とする現在の競争的社会秩序を説明する用語である。その秩序は、世界中に広がっており、複数の国家を取り巻くシステムである。権威主義的な原則に基づき、拘束力によって維持されている。拘束力を支配している権力者は数人のエリートで、彼らのほとんどは、西洋先進国出身の男性である。彼らは西洋的な合理性に基づく教育を受けおり、そこで習った合理的な立場から世界の経済および政治を営む。彼らがもつ合理性には人間や国家の価値を図る基準もあり、それによって生じる不平等は当然なものとされる。[29]

個人や社会のレベルにおける戦争システム

の表れの一つは「暴力の文化」(culture of violence)である。暴力の文化は、直接的な暴力だけでなく、その核心には敵意、憎しみ、絶望、無関心などの心の中にある暴力も含まれる。[30] これらによって、日常性が暴力化し、それが平和を阻む。

戦争システムや暴力の文化を支えるメカニズムの一つは「軍事化」である。リアドンは「軍事化」(militarization) を軍事的な価値、軍事的な政策、軍事的な準備完了状態を強調する過程として説明する。この過程では民間的な機能が軍事的な機関に移譲されることをしばしば伴う。社会が脅威にさらされているときには、軍隊の強化をはじめ、軍事予算の増加によって解決をはかることがもっとも有意義であるという意識が高まり、世論が軍隊などの強化を目的とする政策を支持する。軍事化の指数としては、軍事支出の増加、軍事的な解決を盛んに議論することなどがある。一般市民が軍事化に参加する場合もあるが、決定者には女性やセクシュアル・マイノリティがほとんどみられない。[31]

エンローは、軍事化を「何かが徐々に制度としての軍隊や軍事主義的基準にコントロールされたり、依存したり、そこからその価値を引き出したりするようになっていくプロセス」であると定義する。[32] 私たちは、日常生活の中でほとんど知らないうちに暴力の文化に参加し、戦争システムを支持し、支える。軍事予算の増加などに賛成することは具体的でわかりやすいが、日常生活における軍事化は気づきにくい。エンローは、次のように缶詰のトマトスープを使って不可視な軍事化を可視化する。

欧米の缶詰のスープに具として使われるパスタは普段アルファベットの形をしているが、サッチャー時代にイギリスで販売されていたあるメーカーのトマトスープには、スターウォーズ用の軍事衛星の形のパスタが使われていた。[33] スープを飲みたがらない子どもを持つ母親が衛星の形をしたパスタが入っていれば飲んでくれると思えば、そのスープを買う。衛星型のパスタを考えた広報担当者や生産販売した会社をはじめ、買う母親や喜ぶ子ども。この人たちはみな、軍事化されている。スープを買うときに「戦争」を思い浮かべたりはしないであろうが、軍事化が日常に使用する製品を通じて私たちの生活の中に浸透してくる。しかし、すべてのものがいつも軍事化されているわけではない。狩のために銃を使っている人は、必ずしもその銃を人間に向けるわけではないし、狩によって生活しているのであれば、銃は軍事化されているとは言えないのかもしれない。むしろトマトスープのように、本来ならば軍事的な目的と無関係にあるはずのものが軍事的な基準と価値に依存していることが軍事化の証拠であろう。

エンローが軍事化を論じる際に、母親と子どもとスープを事例として取り上げるのは偶然ではない。なぜなら、軍事化には、兵隊などが象徴する「男らしさ」だけではなくて、そのような「男らしさ」を支える「女らしさ」もあるからである。夫や兄弟を兵隊として送り出す女性たちだけではなくて、トマトスー

プを買う母親も戦争システムの「女らしさ」の一環を演じている。軍事化は性・ジェンダー・セクシュアリティと結びついているのである。

軍事化はなぜ広がるのか。人々を「怖い」ものから守るのが軍事化を正当化する方法の一つである。国家のレベルで考えれば、敵から国を守るためには武装化すべきという議論になる。個人のレベルにおいて、泥棒などから身を守るためには警備会社に頼むという方法もあるが、銃をもつべきだという議論もある。軍事化の過程そのものは暴力的ではない場合が多いが、軍事化の結果、暴力が正当化されたり、使われたりすることはしばしばある。軍事化が進むと、さまざまな問題に対して暴力的な解決方法をさぐるようになり、暴力的な解決策が「当然」になってくる。[34] たとえば、9.11のテロは、アメリカ人をはじめ、世界の人々にとって恐怖の象徴の一つとなっている。アメリカのブッシュ大統領は、その「恐怖」との「戦い」を「正義のための戦い」として位置付けて、その正当性を訴える。それに対する支持の原動力の一つは軍事化にあると考えられる。もちろん、日本における有事法制の動きも同様のメカニズムによるものであろう。

軍事化や暴力の文化を広める強力なメカニズムはテレビや映画などの大衆文化、とりわけ報道関係のマスコミである。マスコミなどを通して示されるジェンダーやネーションは、私たちがもつイメージを固定化する。たとえば、イラク攻撃に備えて、アメリカは中東地域に兵隊を次々と送り込んでいた。テレビのニュースでみた米兵のほとんどは男性で、銃を持ったり、戦車に乗り込んだりしているシーンが多かった。メディアを通して見せられる彼らの強そうな兵隊らしい姿は頼もしい。そして同時に男らしい。戦争へでかけていく男たちは、安全保障の担い手として出て行くわけであるが、彼らはそこで「ジェンダー」を演じる。内心は怖いかもしれない。暑くて、苦しいかもしれない。しかし、彼らにそのような「男らしくない」側面があったとしても、私たちには見えてこない。

アフガニスタンでは、多くの女性と子どもが、長く続いている爆撃から逃れて、隣国の難民キャンプに滞在している。攻撃開始の頃、テレビを通してみた彼女らの姿は強くて頼もしいものとして報道されることはなかった。むしろかわいそうで、悲惨な人たちとして報道されることが多かった。弱い女と子ども。助けを必要とする女と子ども。犠牲者としての女と子ども。出兵する米兵と非常に対照的である。実際には難民キャンプでは男性より女性が圧倒的に多く、普段、男性がする仕事まで女性は担わなければならない。おそらく、そういった女性たちはかわいそうで弱いというより、彼女らこそが強くて頼もしい。しかし、「弱い女」と「強い男」という二つのジェンダー・ステレオタイプを見せられる私たちは、わかっていながらも無意識のうちに「女性や子どもたちを守るための戦争」に賛成するように心が動かされる。[35]

このようにして、戦争システムは暴力および軍事化と不可分な関係にあり、一方が進め

ば、他方もついてくることになる。その結果、あらゆる問題に暴力的な解決を求める傾向が強化される。グローバル化によって、戦争システムは世界のいたるところへと広がり、さまざまな社会的暴力を正当化する材料を提供する。世界的な武器貿易とそれを支える市場、武力紛争の頻度および規模の増加、紛争の周辺にある暴力（例えば戦地や難民キャンプにおけるレイプなどの性暴力、日本軍慰安婦のような国家による性暴力、軍事基地周辺で起こる性暴力など）がその例である。これらの現象は、戦争システムを背景とする軍事化や暴力の文化の具体例として認識できる。

「暴力の文化」を「平和の文化」に変えることは可能であろうか。戦争システムは不平等を前提とするシステムであり、社会的に優位にあるエスニシティ、階層、ジェンダーは、権力をはじめ、社会の諸資源への接近がほかの人たちよりたやすく、成功する確率が高い。人権規約などは、すべての人々の平等を主張する一方、現実には不平等の存在が日常化されており、「当然」となっていることが多い。ジェンダーに関して言えば、上述したように、男性は女性より優先されることが多い。この是正を目指すのがフェミニズムである。しかし、同じフェミニズムとはいっても、構造そのものを再構築しなければ平等を実現できないと考える立場もあれば、現在の秩序に女性の参画を増やすことによって実現できると考える立場もある。私は、リアドンらと同様に秩序そのものがジェンダー不平等の上にできていると考えているので、「平和の文化」の創造には、システムそのものの再構築が前提の一つとなる。

しかし、「平和の文化」を創造するには、リアドンやエンローが指摘する性差別（女性に対する差別）の是正だけでは不十分だと考える。なぜなら、上述したように、彼女らがいう「女性」または「男性」、そして二つの性別・ジェンダーに基づくシステムそのものにも問題があると考えるからである。つまり、戦争システムが前提とする「性」や「ジェンダー」そのものも問題視すべきであろう。本稿でいう「日常性」とは、軍事化によって日常化してきた暴力の増加の中で、「当たり前」だと思われる「性」と「ジェンダー」のことである。その中身に着目することによって、性・ジェンダー二項対立から生じる暴力が浮き彫りにできると考えられるからである。

国家や戦争とジェンダー・セクシュアリティの関係は、社会的に形成される「男らしさ」「女らしさ」から始まる。男という性は、先天的に暴力を好むわけではない。それにもかかわらず、暴力的な犯罪を犯す人には男性が圧倒的に多い。ほかの要因もあるであろうが、男性の暴力のきわめて重要な要因の一つは、社会的に暴力的な行動と男らしさが結びついているところにあると思われる。女性は必然的に平和を愛するわけではなく、すべての女性が子どもを生みたいと思っているわけでもない。それにもかかわらず、そういうイメージがある。女の子どもは小さいときから、女の子らしい気遣いを学び、それが「母」という大人をつくり上げる。このようにして、戦

争システムと暴力の文化による圧力は、文化によって異なるだけではなくて、ジェンダーやセクシュアリティによって異なるものである。セクシュアル・マイノリティをはじめ、その圧力に抵抗しようとする人たちは、平和を阻む日常性にぶつかることになる。

6．暴力の文化から平和の創造へ？

性・ジェンダー・セクシュアリティ。それらはネーションや国家によって構築されると同時にネーションや国家を構築する。グローバル化が進む中で、暴力の文化がますます広がり、私たちの生活の隅々まで浸透しつつある。戦争システムに取り巻かれながら、私たちは個人としての日常生活を営む。

Gはなぜ殺されたのか。Gが住んでいたアメリカ合衆国は戦争システムにおける中心的な役割を果たしており、暴力の文化を拡大する極めて重要な担い手である。アメリカでは一般的にみても殺人や暴力が多く、セクシュアル・マイノリティに対するヘイト・クライムはそれほど珍しいものではない。しかし、セクシュアル・マイノリティに対して寛容であるカリフォルニア州サンフランシスコ市の近くの街で殺されたということも手伝って、Gの死がセクシュアル・マイノリティの運動に大きなインパクトを与えた。

本稿を書くに当たって、Gの死に関するウェブサイトを複数調べた。そこでわかったことは、セクシュアル・マイノリティ団体やマスコミ関係をはじめ、多くの人々はGの死をきっかけにセクシュアル・マイノリティを取り巻く暴力に対する懸念を示していると同時に、それを止めようとするさまざまな活動を展開していることである。[36] 活動のほとんどはセクシュアル・マイノリティの人権を訴えるものであるが、興味をもったものの一つは「トランスジェンダー追悼の日」(Transgender Day of Remembrance) の運動である。[37]

1998年11月28日に殺されたリタ・ヘスターを追悼するために始まった同運動は、一般的に嫌われているTGの人たちに光を当て、普段報道されないTGに対するヘイト・クライムに一般の人々の目を向けさせることによって、TGの問題に対する意識向上をはかることが目的である。また、TGの人に連帯する人たちに発言する機会を与え、殺されたTGの「兄弟」を追悼する。顔写真入のホームページをもっており、それぞれの人がどこで、どのようにして殺されたかを明記している。(注37を参照)。Gは2002年10月に殺されたが、11月に各地で開催された「追悼の日」にGの事件も取り上げることになった。その結果、Gの死は多くの人たちの目に触れることになった。

このような活動はまだ規模が小さく、当事者を中心に行なわれている。しかし、今後もっと大きくなることを期待できる。平和の創造に貢献するようになるためには、やはり国家や各地の自治体、一人ひとりの市民も巻き込む必要がある。

同じような形で個人を追悼する運動から始まって、大きくなった運動の一つはカナダにある。やや古い話だが、1989年12月6日にモ

ントリオール市で14人もの女性が銃殺された事件があった。[38] この記憶を風化させないために、「女性に対する暴力のための記憶・行動の日」（National Day of Remembrance and Action on Violence Against Women）という全国「記念日」が国によって制定された。この記念日は、14人の死を考えること以外にも3つの意味があるという。一つは、カナダ社会における女性に対する暴力の現象について考えること。二つ目は、日常的に暴力の脅威にさらされている女性や女の子どもや、ジェンダーを原因とする暴力によって死亡した女性や女の子どもたちのことを思い起こすこと。三つ目の目的は、女性・女の子どもに対する暴力の予防、撲滅のため、カナダ人一人ひとりができる具体的な行動をコミュニティのレベルで考えることである。[39] この運動に興味を抱いたのは、個人の追悼だけではなくて、それをきっかけにコミュニティ単位で社会を変えようとしているからである。暴力の文化がもたらしたものは14人の死であるが、それに対するこの運動は、コミュニティのレベルで対抗しようという努力である。社会に変化をもたらすのは時間のかかることではあるが、このような努力によって、人々の意識を少しずつ変えていくことができよう。

日本では、個人だけではなくて、国家も対象にしている運動の一つとして、日本軍慰安婦問題について取り組んでいる人たちの努力をあげることができる。この運動は「性奴隷」として扱われた元「慰安婦」の人たちの名誉回復を訴える一方、他方において国家による性暴力を裁く必要を訴えている。また、沖縄の米軍基地周辺で起きた米兵による少女レイプ事件については、被害者を守ると同時に、基地とりわけ外国軍の基地の存在そのものを問う必要を訴える運動がある。基地の存在と、その周辺に起こるレイプは偶然に同じ場所にあるのではなく、構造的に結びついているのである。それこそが「暴力の文化」の現れである。しかし、日本では、日常生活のレベルでの暴力、とりわけ、家庭内暴力や女性に対する暴力についての認識、特に公的な認識はまだ低く、今後いっそう声を高くする必要があると思われる。セクシュアル・マイノリティに対する認識も一般的には極めて低い。しかし、ジェンダーの視点から平和の創造に関心を寄せるのであれば、こういった問題の関係性から目を逸らすことはできない。

Gは性・ジェンダーの二項対立に基づく「日常的」なセクシュアル・マイノリティに対する偏見のために殺された。戦争システムや暴力の文化の担い手であるアメリカにいなかったら、殺されなくてすんだかもしれない。しかし、Gは世界のどこにいても偏見の対象となることは間違いないであろう。Gの性・ジェンダー・セクシュアリティは現在の世界において、不可視化され、認識されないことが「日常」的で「自然」であるとされている。そして、その「日常」は軍事化によって暴力化されてきている。同時に、「日常」的である「自然」とされるもの—いわば性的多様性に対する社会の選択的な盲目—も暴力の一つである。Gのような人々が将来殺されなくて

すむためには、その暴力化された「日常」も暴力的である日常性も可視化し、それに対する意識を変えなければならない。それは決して容易なことではない。なぜなら、セクシュアル・マイノリティをはじめ、マイノリティに対する「日常的」な暴力を止めるには、性・ジェンダー・セクシュアリティに関するネーションのありかたを変えなければならないからである。殺された人を追悼するだけでは不十分だが、それが新たなネーション形成のきっかけにはなるかもしれない。Gを追悼しつつ、コミュニティの連帯によってネーションの変化を目指すことが必要であり、それは、あらゆる性・ジェンダー・セクシュアリティを容認する「コミュニティ」を形成することから始めるべきであろう。それによって、平和を阻む「日常性」を変えていくことができると考える。

注

1　Whitaker, Brian. "Government Disorientation," *The Guardian*, 29 April 2003. www.guardian.co.hk/Print/0,3828,4657846,00.html (accessed 2003.05.17). 国連人権委員会で「性的指向を理由とする人権侵害に対する深い懸念」という表現を盛り込んだ決議案に対する反対意見として、同決議案はブラジルによって紹介され、ヨーロッパ諸国が支持したが、サウディ・アラビア、パキスタン、エジプト、リビア、マレーシアの5カ国の反対によって、審議が一年間ほど延期されることになった。

2　Wronge, Yomi S. "In killing, man was part of violence," *Mercury News*, March 2003. (http://www.bayarea.com/mld/mercurynews/news/local/5298617.htm accessed 2003.03.09).

3　Ibid.

4　世界中で殺されたTGの人についての統計を集めているNational Transgender Advocacy Coalitionによると、1970年から2002年11月まで、アメリカ国内で207人、アメリカ以外の国で57人がTGであるために殺された、という。しかし、実際には事件の大多数が報告されていないであろう。(www.ntac.org/resources/stats.asp accessed 2003.05.17).日本で殺されたTG事件（2002年2月25日、川崎市、在日フィリピン人）も報告されている。(www.gender.org/remember/day/who.html accessed 2003.05.23)。また、2000年2月11日に新木場公園（東京都江東区）で33歳の男性が殺された。同公園は、ゲイの人たちの「出会いの場」（ハッテン場）として知られ、被害者はゲイのために殺されたという。(「新木場ゲイ殺人事件」『にじ』創刊号　2002年夏、22－29頁)。

5　「第三の性」はセクシュアル・マイノリティのことを意味するが、主に男性同性愛者やトランズジェンダー（MtF)、インターセックスの人たちのことを指す。文化によっては、社会的に認められ、「第三の性」としての社会的役割がある。たとえば、インドのヒジュウラやネーティヴ・アメリカンのbedarcheがそうである。社会的には第三のジェンダーとして使われる場合もある。Bulbeck, Chilla. *Re-Orienting Western Feminisms: Women's Diversity in a Postcolonial World*, Cambridge University Press, 1998.

6　セクシュアル・マイノリティの定義は難しい。簡単に言えば、レズビアン（女性同性愛者)、ゲイ（男性同性愛者)、バイセクシュアル（両性愛者)、トランスジェンダー（演じるジェンダーは身体の性と異なる人)、トランスセクシュアル（演じるジェンダーに手術や薬を使って身体を合わす人）などのことを指す。身体の性と演じるジェンダーが一致する異性愛者以外の人々の総称。

7　ここで特に問題になるのは、TG－MtFの扱いであろう。例えば「女性のみ」の集会などの場合、TG、とりわけ生物学的・身体的に男性（男性の外性器がある）の人たちを排除するかどうかが問題となる。性暴力被害者の集まり、温泉旅行、ヌード・ビーチといった場合に（元）男性や身体的男性の排除を要求する声がある。なお、FtMの場合はその声はそれほど大きくないようである。アメリカの「女性オンリー」のコンサートなどについては、Van Gelder, Lindsy & Pamela Robin Brandt, *The Girls Next Door: Into the Heart of Lesbian America,* New York: Simon & Schuster, 1996を参照されたい。

8　Kirsch, Max H. *Queer Theory and Social Change*. London: Routledge, 2000を参照。

9　インターセックスについては、たとえば橋本

秀雄 『性のグラデーション：半陰陽児が語る』青弓社 2000年や、Money, John. *Gender-maps: Social Construction, Feminism and Sexosophical History,* New York: Continuum, 1995 を参照。

10 「性」の多様性については、Faustoも面白い。彼女は「性別」として、少なくとも5つの「性」を提唱する：男、女、ハーム（herm、卵巣1・睾丸1）、マーム（merm、睾丸や女性性器の一部あり、卵巣なし）、ファーム（ferm、卵巣、男性性器の一部あり、睾丸なし）。なお、人口における半陰陽の人々の割合を推測することは困難であるが、Moneyは出生者の4％ぐらいだという。
(Fausto-Sterling, Anne. "The Five Sexes: Why Male and Female Are Not Enough," in Williams, Christine L. & Arlene Stein, *Sexuality and Gender,* Blackwell, 2002, pp.468-473.)

11 上野千鶴子 「ジェンダー研究への誘い」、AERA Mook 『ジェンダーがわかる』朝日新聞社 2002年、4頁。

12 自らの性別に基づいて、社会が要求する役割は性的役割（sex role）と呼ばれてきた。性別とジェンダーの概念をわけたところで、性的役割とジェンダー役割（gender role）とを区別できるようになったが、性とジェンダーが一致していることを前提に基本的には同様に使われる。本稿では「性」より本人が演じる「ジェンダー」を重視するので、「ジェンダー役割」という言葉を使用する。演じるジェンダーは必ずしも身体の性別と一致しているとは限らない。

13 身体の性をそのまま自認しながら、ジェンダー役割を身体と違う役割を演じる人たちがいる。頻度や度合いが異なるが、いわゆる「男っぽい女」や「女っぽい男」、近くで見てもジェンダー役割や性別がはっきりわからない人は珍しくない。

14 GIDとは、一般的にいうと体の「性」と心の「性」が一致しないことである。GIDの人たちは体に対する強い違和感を抱き、ホルモン治療や手術などによって、体の「性」を再指定することで心の「性」に合わせる。

15 セクシュアリティを人間の性的存在として捉える。性的行動や性的指向が含まれる。日本における「性」の概念形成過程などについては、斉藤光 「セクシュアリティ研究の現状と課題」、井上俊、他編 『セクシュアリティの社会学』、岩波書店 1999年を参照。

16 セックスと対比的にセクシュアリティを使うこともある。「セックスは一つの行為であるが、セクシュアリティは存在そのものである」。（岩男寿美子 加藤千恵編 『女性学キーワード』有斐閣 2000年 29頁）。

17 Lorber Judith, *Paradoxes of Gender,* Yale University Press, 1994, p.59. ローバーの分析が役に立つと思われるのは、セクシュアリティの捉え方の多様性を示している点である。

18 ジェンダー・ヒエラルキーとは、一つのジェンダーにかかわるものが、もう一つのジェンダーにかかわるものより優れている（価値がある）という認識である。社会の中で、男性のものを基準にすることが多いが、たいていの場合、男性にかかわるものは女性にかかわるものより優れていると見られることが根拠にある。たとえば、女性は男性の服装をするのはかまわないが、男性が女性の服装をするのはおかしいと考える人が多い。極端な例として、軍服に女性がズボンを穿くのは当然であるが、兵士がみなキルトを穿いても、ひらひらのスカートを穿くことはない。

19 たとえば、Gはラテン系の人であった。Gのセクシュアリティは、ラテン系の男性たちの「マチズモ」と反するものだったため、Gに対する暴力がいっそう強まったという考えもある。

20 アムネスティ発表国際ニュース2001年6月22日（www.incl.ne.jp/ktrs/aijapan/2001/06/010605.htm, accessed 2003.05.23).

21 Tully, Carol T. *Lesbians, Gays and the Empowerment Perspective.* New York: Columbia University Press, 2000, p.177. タリーによると、1990年代初期のアメリカには動物保護の施設は4300もあったのに対して、暴力を受けた女性のための施設は1500箇所で、男性のための施設はなかった。女性のための施設のほとんどはレズビアンの入居を断ることにしている、という。

22 http://www.ipsnews/net/hivaids/new_2612_4.shtml (2003.05.17), p.3.

23 「ネーション」としての共通のアイデンティティを持つ人々は、中国人や韓国人のように世界中に散らばっている場合もあれば、アイヌのように一つの国の中でも極めて少数である場合もある。アンダーソンのように、ネーションは物理的なものより「想像の共同体」として考える人もいる。（Andersen, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism,* London: Verso, 1991, pp.5-7)。「ネーション」としての共通のアイデンティティを主張する極めて小さい単位として、エスニシティ（エスニック・グループ）がある。ホブズボームによると、ナショナリズムは政治的な課題（project）であるのに対して、エスニシティが「我々」と「彼ら」を分けるもっとも手ごろなグループ・アイデンティティである。ナショナリズムを研究する学

問は政治理論であるのに対して、エスニシティは社会学や人類学の分野に入ると指摘する。(Hobsbawn, Eric. J. "Ethnicity and Nationalism in Europe Today," in Balakrishnan, G. *Mapping the Nation,* London: Verso, 2000, pp.255-266).

24 Yuval-Davis, Nira. *Gender and Nation,* London: Sage 1997, pp.11-25.

25 Lorber Judith, *Paradoxes of Gender,* Yale University Press, 1994を参照。

26 Msg. Karaman. 引用は Op.Cit., Yuval-Davis, 1997, p.25, note 1 より。

27 軍隊における女性の地位のほかに、軍隊におけるゲイ・レズビアンの地位の問題がある。任務の目標達成より性的指向が優先される場合もある。たとえば、イラクを攻撃するにあたって、米軍はアラビア語の専門家が不足していたにもかかわらず、数人ものアラビア語専門家が「同性愛者」を理由に解雇された。BBC News, "Army Sacks Gay Arabic Experts," 15 November 2002. http://news.bbc.co.uk/1/low/world/americas/2479777.stm(accessed 2003.05.20). 軍隊と女性については例えば Enloe, Cynthia. *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives.* University of Berkely Press, 2000.

28 Alexander, M. Jacqui. "Not Just (Any) Body Can be a Citizen: The Politics of Law, Sexuality and Postcoloniality in Trinidad and Tobago and the Bahamas," in Weeks, Jeffrey, Janet Holland and Matthew Waites, eds. *Sexualities and Society: A Reader,* Cambridge: Polity, 2003, pp.174-182.

29 Reardon Betty, *Sexism and the War System,* Syracuse: Syracuse University Press, 1996, p.10-13. (和訳：山下史訳、『性別主義と戦争システム』勁草書房1988年)。

30 「家族、通信、テレビ番組における言動の暴力はこの暴力の文化の形成に貢献している。ポルノは女性たちの尊厳を傷つけると同時に彼女たちに対する暴力を増やす。街角で子どもたちが殺され、家の中で家族が怖がる。その原因である暴力の文化は社会を炸裂してしまっている。」("Confronting a Culture of Violence: A Catholic Framework for Action," A Pastoral Message of the US Catholic Bishops, 1994, http://www.nccbuscc.org/sdwp/national/criminal/ccv94.htm, accessed 2003.05.16)。

31 Op.Cit., Reardon.

32 シンシア・エンロー「軍事化とジェンダー—女性の分断を超えて」『思想』2003年第3号および Op.Cit, Enloe, p. 3.)

33 Ibid, Enloe, pp. 1-2. なお、メーカーは軍事衛星をよろこぶのは男の子だと考えて、主に男の子を対象にした。このようにして男の子どもは、女の子と違った形で暴力の文化・軍事化の影響を受ける。

34 映画「ボウリング・フォー・コロンバイン」(米、2002年)は、アメリカの銃器問題についてのドキュメント映画である。アメリカにおける銃殺率が極めて高い理由として、「恐怖」をあげている。この「恐怖」は、リアドンがいう「信念に取って代わる」ものとして理解できよう。

35 岡真理 2003年国際政治学会秋季研究大会研究発表「<女性>が泣いている—真実はなぜ、<女性>によって担保されるのか—」より、2003年10月15日。

36 セクシュアル・マイノリティは暴力の対象となると同時に自らに暴力を向ける傾向がある。たとえば、アメリカではTGの若者の53%は自殺を図ったことがあるという。Bennet, Kathleen. "Sexual Minorities Teens at Risk," April 1997. (www.drizzle.com/~kathleen/wla/lgb_yout.htm,accessed 2003.05.17).

37 www.gender.org/remember/day/what.html (accessed 2003.05.21).

38 ある男性が「フェミニストが大嫌い！」と叫びながら大学に入り、20分間で27人もの人を撃ち、そのうち、14人の女性が死亡した。この事件については、インターネットでも情報が簡単に検索できる。まとまった記事の一つは、たとえば、"Montreal Massacre: Railing Against Feminists," *Macleans Magazine,* 18 December 1989. www.rapereliefshelter.bc.ca/dec6/macleans.htm (accessed 2003.03.03).

39 カナダ政府のHP, National Day of Remembrance and Action on Violence Against Women 2002年2月6日、http://www.swc-cfc.gc.ca/dates/dec6/index_e.html (accessed 2003.09.03).

主な参考文献

アレキサンダー、ロニー 「国際関係論における『ジェンダーの視点』の意義」『国際協力論集』第9巻第3号 2002・2、71−94頁

アレキサンダー、ロニー 「セクシュアル・マイノリティと戦争—9.11をきっかけに考えたこと」『状況』第3期第3巻第7号 2002年 182-193頁

井上俊、他編 『セクシュアリティの社会学』、岩波書店 1999年

上野千鶴子　「ジェンダー研究への誘い」、AERA Mook　『ジェンダーがわかる』朝日新聞社　2002年
江原由美子ほか　『ジェンダー秩序』勁草書房　2001年
荻野美穂　『ジェンダー化される身体』勁草書房　2002年
加藤秀一　『性現象論：差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房　1999年
橋本秀雄　『性のグラデーション：半陰陽児が語る』青弓社　2000年

Alsop, Rachel, Annette Fitzsimons, Kathleen Lennon. *Theorizing Gender*. Polity, 2003.
Andersen, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism,* London: Verso, 1991.
Balakrishinan, Gopal, ed. *Mapping the Nation*. London: Verso, 2000.
Bulbeck, Chilla. *Re-Orienting Western Feminisms: Women's Diversity in a Postcolonial World*. Cambridge University Press, 1998.
Butler, Judith. *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of 'Sex.'* New York: Routledge, 1993.
Chatterjee, Partha and Pradeep Jeganathan, eds. *Community, Gender and Violence*. Columbia University Press, 2000.
Cockburn, Cynthia & Dubravka Zarkov, eds. *The Postwar Moment: Militaries, Masculinities and International Peacekeeping,* London: Lawrence and Wishart, 2002.
Enloe, Cynthia. *Maneuvers: The Internation-al Politics of Militarizing Women's Lives*. University of Berkely Press, 2000.
Kirsch, Max H. *Queer Theory and Social Change*. London: Routledge, 2000.
Lorber, Judith. *Paradoxes of Gender,* Yale University Press, 1994.
Mayer, Tamar. *Gender Ironies of Nationalism: Sexing the Nation*. London: Routledge, 2000.
Money, John. *Gendermaps: Social Construction, Feminism and Sexosophical History*. New York: Continuum, 1995.
Reardon, Betty. *Sexism and the War System*. Syracuse: Syracuse University Press, 1996.（和訳：山下史訳　『性別主義と戦争システム』勁草書房　1988年）
Van Gelder, Lindsy & Pamela Robin Brandt, *The Girls Next Door: Into the Heart of Lesbian America,* New York: Simon & Schuster, 1996.
Weeks, Jeffrey, Janet Holland and Matthew Waites, eds. *Sexualities and Society: A Reader,* Cambridge: Polity, 2003.
Williams, Christine L. & Arlene Stein, *Sexuality and Gender,* Blackwell, 2002.
Yuval-Davis, Nira. *Gender and Nation*. London: Sage Publications, 1997.

'Everyday' Disruptions of Peace: Interactions between Gender and National/Transnational Violence

Ronni ALEXANDER *

Abstract

What is the relationship between gender and national and transnational violence? In order to address this question, this paper starts by looking at the case of a young transgendered person (Male-to-Female), who we call 'G.' In October 2002, G was murdered in a bar, and her body then dumped in the mountains. Four men were arrested in connection with the murder; one confessed to being there and watching, but not being directly involved. The victim was biologically male, but went to the bar as a female. The man who watched the murder had previously been involved sexually with the victim; he claims that the reason he did not help was that he was afraid of being labeled as a homosexual.

The case of G is not directly related to international relations. However, it is interesting because it allows us to begin to question what it is about gender and sexuality that can induce such violence. It is suggested that in searching for the answer, we must consider the ways in which states and nations construct gender and sexuality, and how gender and sexuality are used to construct nations and states.

The present paper suggests three reasons for why G was murdered. The first, general discrimination toward sexual minorities, is relevant to this discussion in terms of the ways it relates to the latter two reasons. The second cause can be found in the 'culture of violence' which has grown to encompass much of the world. The third reason is a result of the ways that gender and sexuality are constructed, in this case in the United States. Using

* Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

this murder as a point of departure, the paper looks at the inter-relationships among gender, sexuality and violence.

The paper begins with a discussion of the meaning of sex and gender, in order make visible the violence inherent in interpretations of sex／gender as dyads. Next, the concept of the 'war system' is introduced to look at the ways individuals are enmeshed in a system of violence. In particular, it looks at the ways gender, sexuality and nationalism converge, and suggests that the culture of violence and militarization help to promote the use of violence and force. Finally, the paper examines efforts of civil society to change this kind of gender violence, focusing on activities in North America such as the Transgender Day of Remembrance in the US and the National Day of Remembrance and Action on Violence Against Women in Canada.